

残したい
“日本の音風景100選”

発行
環境省
水・大気環境局大気生活環境室
[http://www.env.go.jp/
oto@env.go.jp](http://www.env.go.jp/oto@env.go.jp)

耳を澄ませば聞こえてくる、
目をとじれば浮かんでくる

残したい
“日本の
音風景
100選”

残したい“日本の音風景100選”の 選定にあたって

●その土地の風景とともにある音

私たちの身のまわりには、さまざまな音があふれています。楽器が奏でる音から、自動車や鉄道などが発する音、鳥の鳴き声や林のざわめきなどの自然界から生まれる音まで、実に多種多様です。

そのなかには、その場所でしか聞くことのできない、その土地の風土を背景にした音もあります。そこでの“聞く”という体験は、音そのものだけではなく、目で見える風景とともに感じる、聴覚と視覚の体験といえます。このような、音の環境全体として体験される世界——それが「サウンドスケープ〈soundscape：sound（音）とlandscape（風景・景観）の複合語〉＝音風景」です。

日本は、四季の自然の変化に富み、多様な生き物に恵まれた国です。地域の風土にはぐくまれた文化も豊かに受け継いできました。そしていまも、日本各地で、それぞれ独自の音風景が残っています。その音風景は、そこで生活を営む人にとっては心にゆとりを与えてくれる、とても大切な、いわばふるさとのようなものかもしれません。

●まもり、伝えていきたい音風景

しかし、近代化・都市化の進展にともない、忘れられた音風景、失われつつある音風景も少なくありません。

そのような音風景をまもるために、平成8年、環境省(当時環境庁)では、「全国各地で人々が地域のシンボルとして大切に、将来に残していきたいと願っている音の聞こえる環境(音風景)を広く公募し、音環境を保全する上で特に意義があると認められるもの」として「残したい“日本の音風景100選”」を選定しました。

この100選は、日本の音風景の多様性がそのまま反映されたものとなり、自然環境だけではなく、文化や地場産業が形成する音風景も含めた、幅広い内容になりました。その音源も、鳥の声や昆虫の羽音などの〈生き物の音〉から、川の流れや海の波などの〈自然の音〉、祭りや産業などの〈生活文化の音〉まで多岐にわたります。それぞれがその地域固有の、後世に伝えたい大切な音風景です。

●音風景の保全から地域づくりへ

本事業の大きなねらいは、「日常生活の中で耳を澄ませば聞こえてくるさまざまな音についての再発見を促す」ことです。音風景100選をもとに、より多くの人々に、自分の身近にある大切な音風景に気づき、関心をよせていただきたいと願っています。

また、「良好な音環境を保全するための地域に根ざした取組を支援する」ことも目的としています。本事業をきっかけに設立された「全国音風景保全連絡協議会」の主催により、認定地団体や一般市民の参加によって、平成9年から毎年「音風景保全全国大会」も開催されています。さらに、地域の人々を中心として、認定された音風景の周辺の環境を整備し、街づくりを進めている自治体もあります。

日常の何げない音に耳を澄ますことで、自分の音風景を発見する。それをまもり、将来に残していこうという意識が、身のまわりの自然環境保全、文化の継承、さらには地域づくりへとつながる——。この「残したい“日本の音風景100選”」の事業が、そのような可能性を広げていく契機になることを、大いに期待しています。

日本の音風景検討会

座長 山下充康 (財団法人小林理学研究所理事長)

岡島成行 (環境ジャーナリストの会会長)

品田 稔 (国際武道大学教授)

橘 秀樹 (東京大学生産技術研究所教授)

鳥越けい子 (聖心女子大学助教授)

堀 繁 (東京大学アジア生物資源環境研究センター教授)

宮川輝子 (静穏権確立をめざすグループ会長)

湯川れい子 (音楽評論家、環境を守る女性の会WOMEN-1000代表)

渡辺俊雄 (NHK編成局副部長)

(肩書は平成8年当時のもの)